

リクール解釈学における疎隔概念の二重性

卷田悦郎

P・リクールは、一九七八年に、彼の哲学の統一性をそれぞれ別のところに見出そうとしている二つの論文について、両者の示す判断は対立しないことを主張している。⁽¹⁾二つの論文とは、リクール哲学の核心をテキスト概念に見るD・ペラウアーの論文と、⁽²⁾隠喩の媒介的想像力にその統一性を求めるM・シャルデンブランドの論文である。⁽³⁾リクールによれば、一方で、隠喩は詩的テキストの縮図であり、他方で、テキストはその解釈において読者を想像的に変容させる。⁽⁴⁾従って、テキストの認識論と隠喩の存在論は交差するのであり、このことが作爲的に設定されたものではないことを示すが、未刊の『意志の詩学』の課題の一つであると言っているのである。

我々がリクールの一九七八年のこの言明に触れたのは、それが、この論考が対象とする彼のテキスト理論、つまり、一般解釈学理論における認識論と存在論の不十分な媒介を彼自身、自覚していることを示唆しているからである。しかし、リクールはこのことをいつから意識するようになったのであろうか。ペラウアーとシャルデンブランドの二つの論文を対比した時からであらうか。それとも、一

般解釈学理論が発表され始めた時、即ち、七〇年代の初頭からであらうか。我々は、この論考で、少なくとも七〇年代半ばまでは、この認識論と存在論の共存についてリクールは意識的ではなかったことを、その理論の要の一つを成す疎隔概念の二重性を指摘することによって、明らかにしたい。その疎隔概念に関して、我々がここで検討しようと考えている仮説は次の通りである。即ち、リクールが精神科学の客観性の存在論的条件として伝統への帰属 (appartenance) と弁証法的に関わらせようとした疎隔 (distanciation) は、二つの異なる疎隔、つまり、認識論的な疎隔と存在論的な疎隔から構成され、しかも、後者はリクールの意図に反して何ら精神科学の客観性を保証しない。

この仮説が証明されるなら、我々はリクールの一般解釈学理論には認識論と存在論が不整合に同居しており、それ故、彼自身それについて必ずしも意識的ではなかったことを確かめることができる。その上、この疎隔概念の分裂が、むしろ、リクール解釈学の企図を真に実現する方途を示唆するものであることも発見できるのである。

う。

以上のような意図を達成するために、我々は、まず、リクール解
釈学における疎隔概念の位置を明らかにし(Ⅰ)、次に、認識論的な
疎隔概念を(Ⅱ)、そして、存在論的な疎隔概念を(Ⅲ) 際立たせる。
更に、後者がリクールの認識論的な企図にそぐわないものであるこ
とを示し(Ⅳ)、最後に、それまでの議論をまとめてから、リクール
の企図を救う方法を提案する(Ⅴ)。

1

リクール哲学は一九六〇年に出版された『悪の象徴論』をもつ
て、実存主義から解釈学へ転回するが、一九七〇年前後にも、リク
ール自身の次の言葉に表れているような、解釈学内部でのある発展
を経験する。

「教年前、私は解釈学の課題を、まず第一に、隠喩的・象徴的言語
における意味の諸層を解読することと結びつけて考えていたもので
ある。しかしながら、今日、私は隠喩的・象徴的な言語は解釈学の
一般理論にとって範例的ではないと考えている。この理論は、エッ
リチュールや文学作品を含む、ディスクール⁽⁸⁾の全問題を包括しなけ
ればならない。」

この「解釈学の一般理論」は、そのほとんどが、七〇年代の初頭
から中葉にかけて、観点を異にする様々な論文として発表されてい
るに過ぎない。しかし、重複する部分が大きく、一個のまとまった

理論を構成していると言うことができる。本稿は、これらの諸論文
を主要な資料とするものである。

リクールのこの一般解釈学がどのような狙いの下に企図されたも
のであるかは、彼の「解釈学の課題」⁽⁹⁾(一九七三年) という論文に
詳しい。彼はその中で近代解釈学の歴史をたどりながら、解釈学が
今日解釈すべき課題、それ故また、リクール自身が引き請けようと
している課題をそこから引き出している。精神科学は人間的現象を
対象とする故に、その方法は主観的でなければならないが、他方
で、それは自然科学とその科学性において匹敵しあう客観的な学問
でなければならない。ディルタイ解釈学において極限に達する、こ
の主観性と客観性のジレンマは、ハイデガーによる解釈学の存在論
化によっても解決されず、それどころか、精神と科学の間から存在
論と認識論の間に移されて一層悪化している。ガダマーは諸学との
対話を通して存在論から認識論への回帰の道を歩み始めはしたが、
依然としてハイデガーの真理を擁護してディルタイの方法を排除し
ている。それ故、ハイデガー・ガダマーの存在論的解釈学に、精神
科学の客観性を保証する批判的契機が導入されなければならない。
これが、リクールの一般解釈学を動機付けている認識である。

精神科学においては、研究者がその対象に帰属していることは疑
いえない。しかし、他方で、精神科学が仮にも科学であるなら、そ
れは客観的な説明手段を持たなければならない。この説明手段の存
在論的条件としてリクールが持ち出すのが、疎隔(距離をとること
と)である。帰属が了解を存在論的に基礎付けているように、疎隔
は説明を可能にしなければならない。了解がディルタイにおけるよ

うに主観主義化されないためには、それは説明に媒介される必要があるが、その前に、まず、存在論のレベルで帰属と疎隔が弁証法的に結びつけられることが要求されるのである。

疎隔が精神科学の対象に全く外的なものであるなら、それを研究者の対象への帰属関係と弁証法的に関わらせるのは難しくなる。そこで、リクールは精神科学の対象の範例として言語をとり、その言語に本質的な疎隔を見出そうとした。この場合、言語とは構造言語学という非時間的な閉体系としてのラングではなく、ラングの実現としてのパロール、つまり、使用における言語である。だが、リクールはパロールではなく、専らディスクールという語を用いる。というのも、パロールはラングの対概念として、単なる一過的出来事と考えられがちだからである。これに対して、ディスクールは時間の中で普遍性を獲得しうる、言い換えれば、疎隔を受け容れることができることされる。

疎隔とは具体的にどのような現象を指すのであろうか。リクールは「疎隔の解釈学的機能」⁽¹⁰⁾(一九七三年)の中で、四つの疎隔を挙げてゐる。

1、出来事の意味への疎隔。我々が話し、聞く言語において既に、自然発生的な仕方では疎隔は生じている。発話の出来事(言うこと)はその場ですぐに消えてしまいが、聞き手がそれを了解する際、命題構造を主とするその意味内容(言われたこと)は存続し、伝達される。了解において出来事は意味へと超出する。これが第一の疎隔である。⁽¹¹⁾

2、原状況のエクリチュールへの疎隔。ディスクールは文字へ外

在化されることにより、時代を超えて残る。即ち、それはテキストとして、著者の意図や原読者、それが産出された社会的な原状況から意味論的に自律する。これが第二の疎隔である。⁽¹²⁾この疎隔は第一の疎隔に基礎付けられ、それを引き継いで意図的に発展させる。ディスクールにおいて書き込まれるのは、その意味なのである。

また、エクチュールは、大抵の場合、文の総和以上のもの、つまり、作品として存在し、文学作品とか日記とかの特定のジャンルに組織されている。この作品化は疎隔とは呼ばれないが、テキストを了解するには説明を経由しなければならない、というリクールの主張の一つの根拠となっている。

3、日常的現実の可能的現実への疎隔。ディスクールが文字として書き込まれる際に、それが持つ指示も大きな変化を被る。この場合、指示 (référence, Bedeutung) とは、ディスクールに内在的な意味 (sens, Sinn) に対して、それがそれについて述べていること、ないしは、そのようにディスクールが外へ、現実へ向かう機能のことである。指示は、対話的な状況においては、対話者たちが共有し、彼らの前に現前している環境 (Umwelt) に向かっている。つまり、それは明示的なものである。これに対し、テキストの指示は非明示的で潜在的である。というのも、テキストは環境よりも、むしろ、世界 (Welt) について語っているからである。例えば、我々は古代ギリシアについて、書かれたテキストを読むことによって、我々を取巻く現在の状況を超え、直接的に知覚しえない世界に開かれる。文学作品はしばしば虚構として現実への指示を持っていないと見なされるが、実は、日常的現実への指示を中止することによって、我

々の世界内存在の新しい次元を開示するような根源的指示を放つのである。いづれにせよ、非明示的指示は、可能的なテキスト世界として、日常の現実を想像的に変容する。これが第三の疎隔である。⁽¹⁴⁾

4、日常的自我の可能的自我への疎隔。このテキスト世界の開示に対応して、読者の主観性の側にも変化が起きる。即ち、読者はテキスト世界にさらされ、新しい存在様式を受けとるのである。こうして、自我は己れの日常的な存在様式に対する批判的な眼差しを獲得する。これが第四の疎隔⁽¹⁵⁾である。

ディスクールはこのように疎隔を含んでいる結果、説明的・客観的な態度を受け容れる。言い換えれば、存在論のレベルにおける弁証法に対応して、了解と説明の方法論的弁証法も可能となる。この弁証法は、まず、了解(推測)から説明(評価)へ、次に、説明(構造分析)から了解へと進む。

テキストは著者の意図から独立し、しかも、文の集合には還元されない全体性を有する。そのため、それは統合の様々なレベルで多義性を持ち、読者は、最初、テキストの意味を様々なレベルで推測しなければならない。しかし、この複数の主観的な推測は評価という客観的な操作に委ねられ、蓋然性の論理に従って順序付けられる。この推測と評価の弁証法を通してテキストの意味が決定されると、構造分析が可能となる。構造分析はテキストを閉体系と見なして、その構成要素間の関係を分析する、因果的説明には還元されない独自の説明的態度である。しかし、テキストは依然として、意味と指示を有する文から構成され、また、神話のように、ある社会にとって基本的なテキストは民族の起源や人間の生死、性などの実存的問題につ

いて、語っており、構造分析はテキストの現実への関わりを完全に抑圧することはできない。だが、構造分析は無駄な作業ではなく、むしろ、最初の素朴な了解を、テキストの根源的で非明示的な指示に関わるより深い了解に高めるのである。了解と説明は、こうして、同じ解釈過程の異なる段階として結びつけられ、精神科学は独得な客観性を保証されるのである。

II

このように精神科学の客観性を保証すると主張される同じ疎隔の中に、我々は全く異なる二種類の疎隔を見出す。その二つの疎隔は距離をおくという点では共通するが、その前提は全く異なっている。最初にとりあげるのは、我々が認識論的疎隔と呼ぶものである。これは、前節(一)で述べた第一と第二の疎隔、つまり、出来事の意味への疎隔と、現状況のエクリチュールへの疎隔に相当する。この場合、認識論的とは、精神科学の客観性を基礎付けようとする態度を指している。具体的には、それはディルタイ解釈学に由来する問題意識である。だが、必要以上に論述を煩瑣にしないために、ディルタイ自身やリクルのディルタイ理解の妥当性については本稿では問題にしない。ただ、リクル自身が言うところに従えば、彼はディルタイ解釈学の認識論的な企図には同意するが、しかし、生の客観性を主張しながら、最終的には了解を他者の心的生への自己投入に基礎付けた心理学主義には反対している。

出来事の意味への疎隔が認識論的であることは、次のリクルの言葉に象徴的に表れている。

「我々が了解しようとするのは、すぐ消え去ってしまうものとしての出来事ではなく、存続しうるものとしてのその意味である。」⁽¹⁷⁾
(傍点、引用者)

ここでは了解は了解されるもの(ディスクール)における存続的なもの、より時間性を免れるものを目指している。了解とは不変性ないし、それに近いものの獲得なのである。この点で、この了解は客観的な認識と軌を一にしている。了解の主観性が弁護されるとしたら、それは、了解の対象が人間的現象という流動的なものだからである。しかし、そこに不変的なものが見出されるなら、了解を方法とする精神科学は、自然科学と同様、客観的でありうる。このように、客観的な認識は対象の非時間化を要求する。対象それ自身が運動している場合でも、そこに不変的な法則が見出されなければならない。もし、現象が全く不規則な流動であるとすれば、認識はその在り様を逐一報告するにとどまり、もはや、それは感覚と呼びえても認識とは呼べないものとなってしまうであろう。客観的な認識が成立するには、現象において同一なものと同じ主観によって繰り返し認められ、あるいは、複数の主観によって認められなければならない。従って、精神科学が科学であるためには、対象の中に不変性が、精神科学の対象の範例を言語に求めるリクルールの場合、意味やエクリチュールが、要請されるのである。

だが、客観的認識が対象を不変化し固定化するのであろうか、それとも、対象の不変性が客観的認識を可能にしているのであろう

か。少なくともリクルール解釈学の論理では、後者である。なぜなら、意味やエクリチュールは単なる認識主観の構成物ではなく、対象(ディスクール)に内在的なその在り方だからである。しかし、この対象から認識へ向かう関係が正しいとしても、我々の見るところによれば、より根本的なのは、客観的認識が対象の在り方を規定しているという関係なのである。客観的認識は現象を非時間的なものと歪め、言わば、生命を抜いてしまう。ところが、こうして主観性の支配の下に現れた客観的な存在者が、今度は、あらゆる存在の最も真正な在り方とされ、主観が、ただ、対象を忠実に、受動的に認識しているような印象が作られてしまうのである。

リクルールの言う意味やエクリチュールは純粹に不変的で客観的な存在者ではない。出来事の意味への疎隔は、時間的なパロールから非時間的なラングへの移行ではなく、あくまでパロール内部での移行である。⁽¹⁸⁾ また、疎隔は即ち止揚であって、出来事は再補足される⁽¹⁹⁾。従って、意味は完全な非時間的存在者とは言えないのである。しかし、リクルールは意味を、出来事において同定・再同定可能なものと理解し、また、意味概念を發展させる際に、⁽²¹⁾ フッサールやフレーゲの意味の理念性・論理性の思想に依存している。それどころか、実際に疎隔を非時間化と言ひ換えてさえいるのである。⁽²²⁾ 出来事の意味への疎隔は、非時間性への到達ではないにしても、非時間性への接近なのであり、このことが正に、この第一の疎隔を根拠付け、特徴付けている。

この疎隔の延長上にある、原状況のエクリチュールへの疎隔についても同様のことが言える。リクルールは指摘していないが、エクリ

チュールもその媒体（紙、皮、石、粘土等）の変化により磨滅を免れないには違いない。しかし、それは原状況や後の時代の読書が持つ歴史性に対して、全時間性、普遍性を持つとされている。⁽²³⁾ エクリチュールは時代を超えるからこそ、原読者の読みとは異なる新しい時代の新しい読書に開かれる。この時間性の回避という性格は第二の疎隔の付随的な性格ではなく、その存在根拠を構成してさえいる。

同じことは疎隔が可能にしている方法についてもあてはまる。評価という操作は多義性の解消を目的とし、多くの事実を考察に入れつつ、それらの間に質的な収束を見出そうとする。⁽²⁴⁾ それは蓋然性の論理に従うのである。自然科学の検証に対して、精神科学は評価という独自の方法を持つとリクールは主張するが、蓋然性とは弱い普遍性のことであって、やはり、現象において繰り返し認められるものへと方向付けられている。このことは、蓋然性に「質的」という修飾語を付けても同じである。質は〈質—量〉という尺度にからめとられることによつて、やはり量に規定されているのである。構造分析も精神科学独自の説明態度とされ、また、テキストの指示を完全に奪うものではないと主張されるが、しかし、対象を自体存在として扱おうとする主観の決意によつて特徴付けられていることには変わりない。もし、対象が主観に影響を与えるようなことがあれば、主観がその対象に対する支配力を保つことは困難であろう。

このように、第一と第二の疎隔は、そしてまた、評価と構造分析という方法は、純粹に認識論的ではないとしても、認識論的な動機に導かれているのである。

III

だが、リクールが精神科学の客観性を保証するため、導入した疎隔や方法が認識論的であるのはむしろ当然であつて、それ故、前節（Ⅰ）の議論は確認以上のものではない。ところが、今度は、我々は精神科学の客観性の条件としては認識論的疎隔と何ら区別されていない第三と第四の疎隔に、全く異なった疎隔概念を認める。我々はこれを存在論的疎隔と呼ぶことにしよう。この疎隔の存在論的性格は、事実に、ハイデガーに由来するものであるが、ここではその影響関係については詳しく触れない。簡単に言えば、リクールはハイデガー解釈学の根源性、反認識論主義を批判するが、了解の脱心理学化・世界化には同意してこれを自身の理論の中にとり入れているのである。ともかくも我々の言う存在論とは、不変的な認識や存在者を目指す認識論とは対照的に、変化そのものを見つめる態度を指している。存在を時間の相の下に捉え人間の歴史性を主張する存在論にとつて、客観的認識や究極的実在の探求は重要ではない。だが、時間的なものの中にとどまるということは相対主義であろうか。しかし、非時間性と対立させられたはかない時間性しか認めない認識論と違って、存在論は時間性の持つ汲み尽しえない豊かさを知っている。

我々はこの意味での疎隔を、第三と第四の疎隔、つまり、日常的現実の可能的現実への疎隔と、日常的自我の想像的自我への疎隔に見る。これらは、第一と第二の疎隔が意味に関わるのに対し、指示に関わっている。ディスクールが書き込まれることによつて、指示

は身近な環境世界よりも、我々にとっては可能的な世界、例えば、異文化や過去に向かう。この可能的世界の可能的性格が最も高まるのが文学作品においてである。この可能的世界の開示によって、日常的な現実と日常的な自我は変容されるのであった。

出来事の意味への疎隔、原状況のエクリチュールへの疎隔が非時間性へ向かう運動であったのに対し、この指示レベルの疎隔はそのような方向性を持たない。それは時間的なものから時間的なものへの運動である。というのも、日常的現実も日常的自我も非時間性によって特徴付けられていないし、同じく時間的と考えられる可能的な現実、自我とそれぞれ比較してより時間性を免れるともされていないからである。非時間化が問題になるのは、テキストへの、外在化においてであるが、日常的なものも、可能的なものもテキストの前に広がっている。確かに、可能的なものは来たるべきものであり、その点で現在を支配する日常的なものよりも時間性において優れていると言えるかも知れない。しかし、可能的なものが来たるべきものなら、日常的なものは可能的なものによって批判され、破壊され、消滅すべきものである。たとえ両者の間に時間性における差があるとしても、存在論的疎隔が導入され性格付けられているリクールの叙述において、それは認識論的疎隔の場合のような根本的な契機として現れない。

このことは、二種類の疎隔に対応する二つの了解概念を見ることによって、一層明瞭になるであろう。既に述べたように、第一の疎隔には了解が介入する。話し手による発話の出来事は、聞き手による了解において意味へと超出する。了解は、この場合、一過的な出

来事ではなく、出来事の後に残る意味へ向かう。ところが、我々が今問題にしている存在論的疎隔では、了解は、むしろ、可能的なもの、従ってまた、時間的なものに向けられているのである。リクールの次の言葉はこのことをはっきりと示している。

「……了解は……事実の把握ではなく、存在可能の把握に差し向けられている。……テキストを了解するとは、テキストに含まれた静的な意味内容を見出すことではなく、テキストによって指示された存在可能を展開することである。」(傍点、引用者)⁽²⁶⁾

時間性の観点からの分析によって現れる了解概念のこうした相違は、リクール自身が疎隔の間に設けた相違に基づきながらも、それ以上のものをそこに付け加えている。

更にまた、この存在論的な疎隔においては、主観による対象の支配が成立しない。意味レベルの疎隔はディスクールの内部で、言わば、主観の前に起こるのに対し、我々が今議論している指示レベルの疎隔は、主観を巻き込んで起こる。非明示的指示から構成されたテキスト世界、可能的世界は、主観が自由に出し入れし、恣意的に操作しうるようなものではない。

「解釈は積義学者の行為^{アクト}である以前に、テキストの作用^{アクト}である。」⁽²⁷⁾

「テキストの指示が世界の提起であるなら、最初にそれを投企するのは読者ではない。読者は、むしろ、テキストそれ自身から新しい

存在様式を受けとることにより、その自己投企能力を拡大されるのである。⁽²⁸⁾」

このように主観の操作が対象に対して二次的で、しかも、主観それ自身がその存在様式の変容を被るところでは、主観が対象を静的な非時間性に閉じ込めるといふような認識論的關係は、成立しえない。第三と第四の疎隔には何ら非時間性への動機は働いておらず、ただ、現実と、主観性の存在様式の変化・更新が問題なのである。これらの疎隔が存在論的と呼ばれるのは、このような理由によってである。

IV

認識論的疎隔、存在論的疎隔の区別は、それぞれ、意味レベルの疎隔、指示レベルの疎隔というリクール自身の区別に基づいていゝる。しかし、彼は自身の区別の持つ意味にどれほど気付いていたであらうか。リクールは存在論的解釈学に認識論的解釈学を接木しようとして、各々の核心的契機である帰属と疎隔の媒介を試みた。ところが、認識論動機を代表する疎隔の中心に、認識論と存在論が媒介されないまま現れてしまっている、というのが我々の主張なのである。従って、我々の区別はリクール自身の区別と形の上では一致しても内容的には、それ以上のものを含んでいる。

だが、一層重要なことは、区別そのものではなく、区別が理論上の矛盾を孕んでいるということである。即ち、二種類の疎隔は精神科学の客観性の条件として同列に持ち出されているにもかかわらず

ず、存在論的な疎隔は何ら客観性を保証しないのである。存在論的疎隔は、実際、日常性と非日常性、現実性と可能性の間に距離をおくが、この距離は客観的認識とその対象の間に生ずる認識論的な距離とは全く違っている。認識論的疎隔は、主体の発話行為という出来事から、主観と対峙する持続的な意味へ、そして、物質性に支えられたエクリチュールへの距離化である。これに対し、存在論的疎隔はそのように主観と客観を結ぶ線に沿って起きるのではなく、むしろ、その線とは直角に生ずる。それは、日常的自我を含む日常的現実から、可能的自我を含む可能的現実への距離化なのである。しかも、この疎隔によってより非時間的なものが現れるわけではない。このような条件の下では、対象を固定化して支配する客観的認識は構造的に不可能であろう。存在論的疎隔は認識論的疎隔と違って疎隔の導入意図に応えないのである。

しかし、これに対し、次のような反論があるかも知れない。即ち、リクールの問題は、ハイデガー・ガダマーの存在論的解釈学にいかにか批判的契機を導入するかであった。彼の疎隔概念はこの批判的契機の導入という点では全く一貫している。認識論的疎隔は客観的に認識しえないものを信奉するドクサに対して、当然、批判的である。しかし、存在論的疎隔も日常的な現実、日常的な自我からの距離をつくることによって、それらを見つめ直し、再考できるように批判的立場を与える。精神科学の科学性は自然科学の科学性のようには狭隘なものではない。

まず指摘しなければならないのは、リクールは、己れの課題をたてるにあたって、言い換えれば、存在論的解釈学への「批判的契

機³⁰」の導入の必要を説く時、あくまで「精神科学の地位という認識論的問題」³¹の回復を意図していた、ということである。それ故にこそ、彼は疎隔を精神科学の客観的操作の条件と定義しえた。従って、リクールがその際考えていた批判性は、ほぼ客観性、科学性ということと同義なのである。³²

ところが、リクールは、そのような仕方でも問題を設定しているにもかかわらず、批判的ということを何の断りもなく別の意味で用いている。その別種の批判とは、存在論的疎隔が可能にする批判である。確かに、我々は日常的現実から隔てられることによって、それに対し批判的になることができる。例えば、その中で生まれ、育ってきた文化から離れて異文化に生活する時、以前は何ら疑問を感じることなく受け容れていた慣習が、異なる慣習との対比の中で相対化される。しかし、この意味での批判は、ただ立場や存在様式の相違が可能にしているような批判であり、そこには相互性がある。このような批判性は客観性を可能にするであろうか。リクールによれば、日常的現実からの疎隔を最も優れた形で惹き起こすのは、文学作品であった。³³しかし、文学作品は日常性への批判を可能にしても、明らかに精神科学の客観性を保証するものではない。

これに対し、認識論的疎隔が可能にする批判は、現象の中に不変的な真の实在を認識し、真ではない存在、ないしはそれを真の实在であるかのように言う錯覚や幻想を排除することであろう。真の存在と真でない存在、真の認識と真でない認識の間には架橋しがたい隔たりが存在する。この意味で、この批判は絶対的だとも言える。また、ここでは主観の対象支配が徹底しているため、究極的には、

認識主観それ自身が批判的となることはない。

従って、客観性の代わりに批判性を持ち出してリクールを擁護しようとしても、このように二種類の疎隔に対応する二つの批判性がひそかに導入されてしまっている以上、それは我々のリクール批判を強化することはあっても、反駁するものではない。

V

以上、我々はP・リクールの一般解釈学における疎隔概念の二重性格を明らかにしてきた。認識論と存在論の間の亀裂は疎隔概念の中に露呈してしまっているのである。それ故、少なくともその理論が集中して発表された時期（七〇年代初頭から中葉にかけて）には、リクールは認識論と存在論の不整合な同居に自覚ではなかったのである。確かに、彼は一九七八年には、『意志の詩学』において真に媒介されるべきこの二つの前提の存在に気付いていたのかも知れない。しかし、それだからといって、リクールは彼の理論の持つ非一貫性に対する批判を免れるわけではないであろう。

だが、我々のリクール批判はその一般解釈学理論の価値をただ否定するものではない。むしろ、それはその理論を一貫したものとして構築し直す途を示唆してさえている。そこで、我々は最後にリクール解釈学を救うための指針を述べて、この論考を締めくくることにしたい。

リクールは存在論的解釈学に批判的契機を導入するのに、即ち、存在論を認識論に引き戻すのにあまりに急だったのである。我々が分析したように、批判には認識論的な批判と存在論的な批判があ

る。彼は両者を区別なく存在論に持ち込もうとしたが、恐らく認識論的な批判は存在論とは本質的に相容れないものであろう。存在論における批判は、ただ、存在論的批判としてののみ可能なのである。

しかし、それだからといって、学問的な批判が無効になると考えるには及ばない。存在論的な批判は、ある人が大人になって子供時代を振り返る時や、民族誌を通じて異文化を知り、自文化を見つめ直す時だけでなく、学問の伝統に属す世界観や思考順序を学んで、前学問的な現実を反省する時にも起きているのである。

客観性は放棄されなければならない。しかし、それが徹底的に存在論化されるなら、我々はそれを受け容れる用意がある。そのような客観性は、存在論的な批判、ないしは疎隔を構成している日常性にその在り処を持つと考えられる。この考え方はR・ローテ³⁴に示唆されるところが大きいのであるが、我々の生活の中には、認識生活も含め、安定した閉空間が支配する時がある。そこでは我々は、ある一定の限界内で諸々の事物や生物、人間の在り方、性格に馴れ親しみ、それらを熟知している。「一定の限界内」といふことを除けば、そこには認識論の世界と極めてよく似た状況が生じているのである。即ち、あたかも主観はあらゆる対象の本質を極め、それらを完全に支配しているかのようなのである。この擬似認識論的な状況を無限に延長できると思い込んだ時に、認識論の幻想が生ずる。しかし、実は、その外には、我々には不馴れな可能的世界が広がっており、閉空間を取囲む円環をいつか必ず破って侵入してくる。この出来事が存在論的疎隔であり、その前後の安定した日常性に存在論的な客観性が成立するのである。

このように考えることによって、我々は存在論の中に認識論を回復するといふリクールの企図を救うことが可能だと考える。

注

〈略号表〉

本注で言及されるリクールの著作・論文は以下の略号を用いる。

CH 'Cours sur l'herméneutique' (1971-1972), Louvain, Institut Supérieur de Philosophie (講義・リクール)

EC 'Expliquer et comprendre: Sur quelques connexions remarquables entre la théorie du texte, la théorie de l'action et la théorie de l'histoire' *Revue philosophique de Louvain* 75 (1977): 126-147

ES 'Événement et sens' dans *Révelation et histoire*, Paris, Aubier, 1971, pp. 15-34

ESD 'Événement et sens dans le discours' dans *Ricoeur ou la liberté selon l'espérance* par M. Philibert, Paris, Seghers, 1971, pp. 177-188 (この論文は英訳として一九七三年に『*Philosophy Today*』誌に発表された。)

FHD 'La fonction herméneutique de la distanciation' dans *Exergis: Problèmes de méthode et exercices de lecture* éd. par Fr. Boven et G. Rouiller, Neuchâtel, Delachaux et Niestlé, 1975, pp. 201-215 (この論文は英訳として一九七三年に『*Philosophy Today*』誌に発表された。)

HIC 'Herméneutique et critique des idéologies' dans *Démystification*

sation et idéologie, Paris, Aubier, 1973; pp. 25-61

IT *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*, Fort Worth, The Texas Christian U. P., 1976
(この本は一九七三年のジュネーヴでキヤンズ・キリンズが講演を行ったことに基づく))

MPH 'La métaphore et le problème central de l'herméneutique'
Revue philosophique de Louvain 70 (1972): 93-112

MT 'The Model of the Text: the Meaningful Action Considered as a Text' *Social Research* 38 (1971): 529-562 (No. 3)

OAE 'Objectivation et alienation dans l'expérience historique'
Archivio di filosofia 45 (1975): 27-38 (n°2-3)

PH 'Phénoménologie et herméneutique' *Man and World* 7 (1974): 223-253 (No. 3)

QT 'Qu'est-ce qu'un texte?: Expliquer et comprendre' in *Hermeneutik und Dialektik* hrg. von R. Bubner, K. Cramer und R. Wiel; Tübingen, J. C. B. Mohr, 1970; S. 181-200
TH 'La tâche de l'herméneutique' dans *Exegesis* (FHDの題名を参照のこと) pp. 179-200 (この論文はFHDと同様で一九七三年に英語で Philosophical Today 誌に掲載された)

(一) *Studies in the Philosophy of Paul Ricoeur* ed. by Charles E. Reagan; Athens, Ohio U. P., 1979; pp. xvi-xvii (このリクルの序文の日付は一九七九年五月となっている)

(二) David Pellauer 'The Significance of the Text in Paul Ricoeur's Hermeneutical Theory' *op. cit.* pp. 97-114

(三) Mary Schaldenbrand 'Metaphoric Imagination: Kinship Through Conflict' *op. cit.* pp. 57-88

(四) リクルはテクニクによって開示された世界の意味を同化しようとするのではなく、テクニクの認識論は存在論へ折り返されるべきであるという方をしようとする。この存在論への折り返りとは、リクル解釈学にならざるが、読者の存在様式の変容のことである。
(五) 但し、リクルが認識論と存在論の同居を、我々が指摘する疎隔概念の二重性として意識しようとするかは不明である。

(六) この「存在論」という語の用法はリクル自身に拠ったものである。この用法は我々の用法とは異なる。Ⅲ及びⅣの冒頭部分参照のこと。

(七) IT p. 78 cf. MT p. 548

(八) 《読者表》に於いて著者のいう認識論はどの主要なものであるか。

(九) cf. TH

(十) cf. FHD

(十一) *ibid.* pp. 203-206 cf. ESD pp. 178-179, ES pp. 16-18, MT pp. 530-534, MPH p. 95, CH pp. 14-16, OAE p. 35, IT p. 8-19

(十二) *ibid.* pp. 209-210 cf. ESD pp. 179-181, ES pp. 18-20, MT pp. 532-535, CH pp. 24-37, HCI pp. 52-53, OAE pp. 32-36, IT pp. 25-44, EC p. 130

- (1) この「意味」は出来事に対してなる意味ではなく、固着を記括する広義の意味である。 cf. IT p. 19
- (14) FHD pp. 210-213 cf. ES pp. 20-21, ESD pp. 181-182, CH pp. 27-31, MT pp. 535-536, HCI pp. 54-55
- (15) *ibid.* pp. 213-215 cf. CH pp. 211-288, MPH pp. 108-109, HCI pp. 55-56, PH p. 236, IT pp. 92-95
- (19) cf. QT pp. 196-197, MT pp. 545-562, IT pp. 71-88, EC (esp. pp. 130-132)
- (21) ESD p. 179, ES p. 18 cf. FHD p. 204, IT p. 12
- (21) *ibid.* cf. IT p. 12
- (21) ESD p. 179, ES p. 18
- (23) MT p. 534, l. 3; CH p. 15; FHD p. 206, l. 17
- (23) MT p. 533, l. 33; CH pp. 213-215; FHD p. 206, l. 13; IT p. 12, l. 17; IT p. 19, l. 13; IT pp. 89-91; ESD p. 179, l. 25; ESD p. 180, l. 35; etc.
- (22) IT p. 93
- (23) ESD p. 185, ESD p. 24 (但し、この論文では、第一に第二の標題をその區別をたづねたこと)
- (24) MPH p. 105
- (22) QT pp. 188-189
- (22) TH p. 193
- (22) QT p. 198
- (22) IT p. 94
- (22) PH p. 234
- (20) TH p. 199 cf. *ibid.* p. 196
- (16) TH p. 195, l. 41
- (23) EC p. 141, l. 36
- (23) HCI p. 55, ll. 1-2
- (24) cf. Richard Rorty 'De l'épistémologie à l'herméneutique' *Dialectica* 33 (1979) : 165-188
- (#キタ・ネツノウ 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)